

知 識 探 訪

多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

「試験」と「優遇政策」からみるマレーシアの教育

金子奈央 (東京外国語大学大学院博士後期課程)

試験社会マレーシア

11 月の図書館は、マレーシア教育資格試験 (通称 SPM) の追い込みをしているフォーム 5 (中等教育 5 年生) の生徒たちで溢れかえっていた。マレーシアは、かなりの試験社会である。

初等教育、下級中等教育 (日本の中学校段階)、上級中等教育 (日本の高校段階) 修了時には全国統一の修了試験が行われる。これらの修了試験でよい成績をあげるために、放課後は多くの子どもたちは塾に通う。在マレーシア日本人学校と現地の小学校が七夕に交流をした際、短冊に日本の児童たちが「サッカー選手になりたい」などと書いたのに対し、マレーシアの小学校 2 年生の子どもたちは揃って「試験で 1 番になりたい」と書き、日本の教育関係者は大変驚いたようだ。それほど、試験や競争が、マレーシアの学校社会では幼いころから身近に存在している。

試験競争は、小学校修了時に受ける初等教育到達度試験 (UPSR) からすでに始まっている。試験の結果は学校の名声へと直結するので、試験直前には、試験対象でない科目の授業を学校側の独断で取りやめ、数学や英語などの試験対策にあてる。2011 年 9 月に行われた UPSR では、学校全体の成績が下がることを恐れたサラワク州のある学校が、学業成績の芳しくない 6 年生の児童数名に試験を受けることを許可せず、自宅や教室外で待機するよう命じたことが明らかとなり、新聞で報じられた。

17 歳の試練 SPM と優遇政策の「壁」

修了試験の中で、最も重要なのがフォーム 5 で受ける SPM である。マレーシアの少年少女にとって、SPM は人生を左右する大きな試練である。この成績で、その後、自分がマレーシアという社会の中にどのように位置づけられ、どのような役割を担うかが決まるといっても過言でないからである。

その一方で、SPM では、実力だけでは越えられないマレーシア特有の「壁」を目の当たりにし、それがこの重要な進路選択に多大な影響を及ぼすことを 17 歳の少年少女は痛感する。

1970 年代に始まった新経済政策 (NEP) のもと、

高等教育の入学においてブミプトラ (マレー人と先住民) を優先する割当 (クォータ) 制度が長らく存在した。これ以外にも、公的な奨学金をもらっての留学、国内の高等教育進学に際して与えられる奨学金についてもブミプトラに優先的に開かれてきた。

さらには、国内の公立大学への進学がほぼ確約されている大学予備課程のマトリキュレーション・コースへの進学の間機は、ブミプトラの子どもたちに限定されて与えられてきた。これらの優先政策により、非ブミプトラは国内の高等教育の進学機会が限られたため、私費留学という道を選んだ。私費で留学する経済的余裕がない場合は、進学を断念せざるを得なかった。

今後の展開

2000 年代に入り、長らく存在したクォータ制度は新しい制度へと転換した。ブミプトラに対する高等教育機関への入学における優先的な割り当てはメリトクラシー (能力主義) 制へと転換したようだが、その変化を実感しているマレーシア人はいまだ少ない。また、以前はブミプトラのみに開かれていたマトリキュレーション・コースについても、非ブミプトラも進学が可能になった。しかし、その割り当ては定員全体の 10% に過ぎず、いまだ狭き門だ。公的修了試験についても、UPSR と、下級中等教育段階の修了試験である下級中等教育評価試験 (PMR) は廃止が決定された。

今後は、一発勝負の試験ではなく、学校における学業成績に基づいた選抜が行われることが決定しており、既に漸次的な移行期間に入っている。「試験」と「優遇政策」の変化が、マレーシアの教育の今後にどのような影響をもたらすのか。今後も注意深く動向を見守る必要があるだろう。

< 筆者紹介 >

1981 年、熊本県本渡市 (現天草市) 生まれ。九州大学大学院人間環境学府修士課程修了。修士 (教育学)。東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士後期課程在籍。専門は、マレーシア地域研究 / 比較教育学。主な研究関心は、多民族社会マレーシアにおける教育政策と教育諸活動の関係。現在は、サバ州の先住諸民族の教育社会史に関心を持っており、マレーシア・サバ大学の社会科学部に留学し、現地調査を行っている。